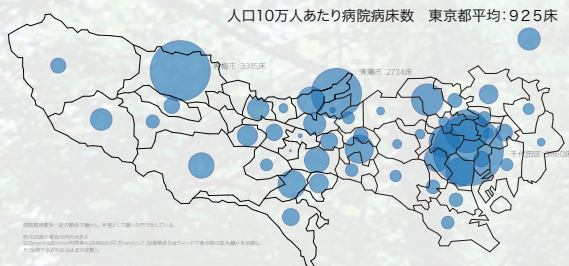


わたしたちは、いつも、いつまでも

清瀬、東京療養所の100年と未来

<参考書籍・サイト>

- 「写真集 清瀬 村から町へ、そして市へ」清瀬市郷土博物館、2010年5月20日発行
- 「写真集 清瀬のあゆみ」清瀬市郷土博物館、2007年3月20日発行
- 「雑木林 清瀬病院の思い出」国立療養所東京病院同窓会、1984年12月25日発行
- 国土地理院



死ぬとか生きるとか、怪我をする、病気することは常に私たちの生活の根本で、隣り合わせなものである。しかしながら**私たちは健康なとき、それらについて深く考えることは少ない**。それが今回、2年間にわたり Covid-19 が猛威を振るったことで、「私たちの体はとても不安定で、互いや自身を思いやりケアをしていく中で保たれている」ものだと、さまざまに知ることになったのでは無いだろうか。私自身は今年の冬、**脱臼骨折に伴う手術、入院の経験**をして如実にこのことを思い知った。そして、私の住まう地域、入院した病院のある清瀬という土地を改めて調べて、敷地に大きく占める病院の背景、結核療養所の歴史を知った。

ここでこの清瀬という敷地に着目して、**療養所を引き継ぐ閉鎖的な大病院と内包された豊かな緑地**、そして隣り合う住宅街の関係性をつぶさに観察しながら、**この場に住み、動き、生きる私たちアクターのこれからのケアのあり方を考えていく**。

清瀬市の結核療養所の歴史

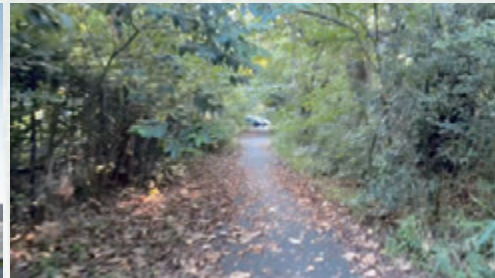
「大気・安静・栄養」の三点を主軸とした治療が基本の結核療養地として、当時雑木林が残り空気が綺麗とされた清瀬に設立の白羽の矢が立った。この経緯を経て、1931年に線路を跨いだ南の雑木林に東京療養所が設立して以来、市内南部は結核治療を目的としてたちまち療養施設街となった。(二代目清瀬病院院長 島村喜久治氏「雑木林 清瀬病院の思い出」を参照)

敷地:「国立病院機構東京病院」

「傷痍軍人東京療養所」「東京府立清瀬病院」二つの結核療養所を母体とする大型の総合病院(詳細は右写真参照)。敷地境界線は高さ約1.8Mのフェンス柵で囲われ立ち入り禁止となり周辺の住宅地と隔絶された巨大な緑地空間を内部に有する。コロナ患者の受け入れも多数行うなど感染症指定病院として病院の規模が大きい一方で周辺住民との関わりはほとんどない。



2005年に新築された国立病院機構東京病院本棟



リハビリテーションの様子(多摩北部医療センター)



1945米軍撮影(国土地理院)



2021Google Earth



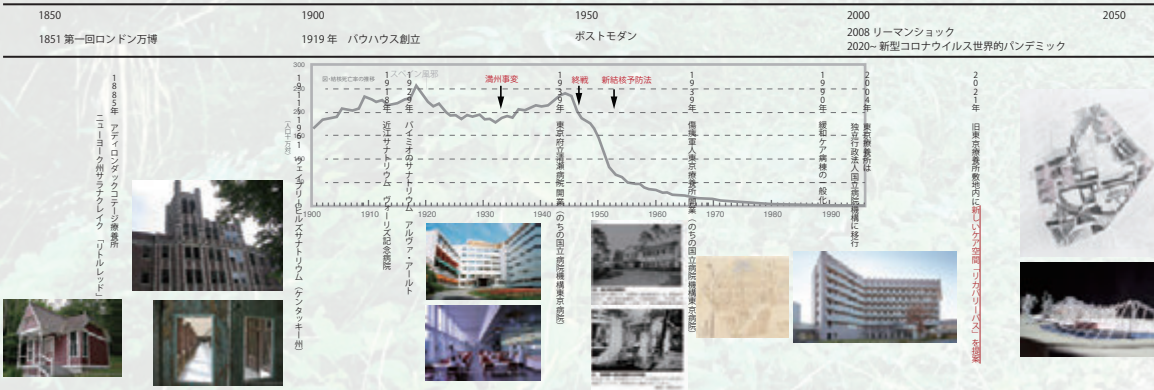
傷痍軍人東京療養所



清瀬市郷土資料館 東京府立清瀬病院

清瀬市郷土資料館

現「国立病院機構東京病院」の母体である「東京府立清瀬病院(1931年設立)」と「傷痍軍人東京療養所(1939年設立)」。1950年代の急速な結核患者数は減少に伴い、1962年に現敷地で「国立療養所東京病院」として再編された。



清瀬市郷土資料館



著者撮影

傷痍軍人東京療養所「外気舎」東京病院南部に移築保存された外気舎は一棟のみ。外気舎とは、外気療法を行ったり作業療法をする患者の病舎のこと。昭和41年に廃止された。保存された外気舎の前には立て看板があり当時の利用のされ方など説明があるが、敷地内立ち入り禁止のため滅多に人の目に触れることはない。

リサーチ：東京療養所を紐解く スケッチで行った設計のスタディ (左側)、敷地境界を .100 で模型化し周辺住宅地域から病院への連続性をとらえた (右側)



提案のスタディ～最終コンセプトドローイング 病院が有する自然の中に建築を作っていく。敷地内外の人々の動きをマッピングし、pathを整備していく。



旧東京療養所配置図 (昭和18年・療養患者2名が作成) 北上に配置
フィールドワークをもとに作成した経路と場のマッピング
初期のリカバリーパス検討のイメージ

リカバリーパスのあり方
現状の閉ざされ、周囲から隔絶された病院空間と、その中に見えなくなっているさまざまな医療・ケアの姿を表出させると共に、現状病院に過度に干渉、破壊を起こさないよう、病院の手入れされていない外交部分を中心に計画していった。中央の病院棟にアクセスする車道は掘り込まれリカバリーパスとは分離されているため、提案する空間は利用者に一切の制限や指示を示さず、各々が自分の目的や自由のために24時間利用できる場となっている。



病院内～東京院への人の移動経路のイメージ。また敷地内の自然環境をスケッチし提案への手がかりとした。



東京病院
リカバリーパス
コンセプト
ドローイング
(鉛筆・色鉛筆)

提案：東京療養所「リカバリーパス」

東京病院内部に、日常的なリハビリテーションの場「リカバリーパス」を整備すると共に敷地境界線の柵を一部撤去する。これにより病院敷地内に、医者・患者・看護師・地域住民・園児といった肩書きに関係なく、全員がその場に許容されるような日常ケアの場が作り出される。病院の敷地境界を緩和し外へと開くことで、わたしたち全員が日常の中で当たり前のように身近に医療やケア、リハビリテーションと共生していく場を創出する。

★リカバリーパスが内包する4つの空間性

清瀬の敷地のコンテキスト、結核サナトリウム時代のコンテキストから読み出した、日常ケアに関する4つの要素を敷地の中にちりばめリカバリーパスに編み込んでいく。

- ①旧正門けやき並木ギャラリー
- ②リハビリテーションプールの架け橋
- ③外気舎と桜の園
- ④市民農園と神社

戦時下を経てテニスコートから桜林へと植え替え
結核患者の作業療法の一環



path が膨らんだり別れたりしてできる建築群は、周囲の木々、草花を余すことなく取り込み利用する光と風の建築である。かつて1930年代から存在した療養の美しい自然と空気を、多様な場を2000年代の計画学的総合病院を経て現在に開く。

けやき並木 1929 植樹

大型マンション

2004 年竣工
東京病院本棟

現メインエントランス
駐車場からプールへ変更

移築保存
「外気舎」

東京病院と社会事業大学
を区切る職員用通路
緑豊かな異路地の雰囲気

1929 建立
神社

福祉施設跡地
には市民農園を設計
「東京病院主催
栄養管理ワークショップ」

既存 下里市民農園

- リカバリーパスの主たる機能**
- ・屋外歩行リハビリテーション
 - ・院内散策路
 - (車椅子・点滴台全面通行可)
 - ・敷地内ショートカット (通勤通学での通り抜け)
 - ・24時間誰でも利用可能な公共空間

リカバリーパスのコンセプト図 (原画は 1:500)



1 旧正門けやき並木ギャラリー

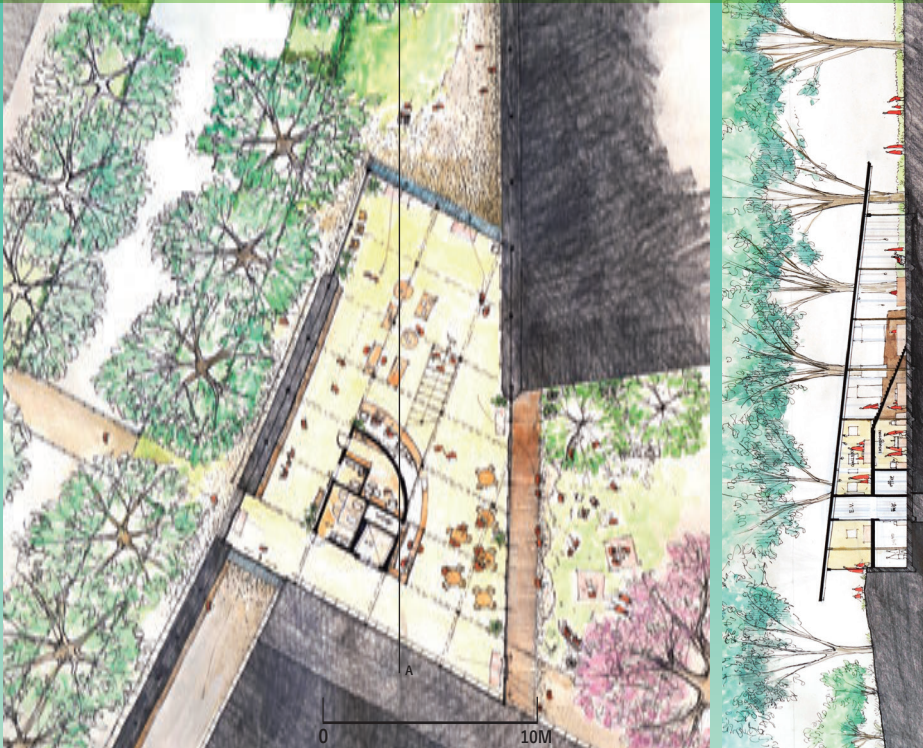
閉鎖された東京療養所の正門跡けやき並木
 本設計では、東京療養所の前身となる傷痍軍人東京療養所が1929年に建設された際に植樹された正門から続くケヤキ並木を整備し、ギャラリーとして一般に開放する。現状東京病院では旧正門は閉鎖されており、草木が生い茂って人通りもない。しかしながら旧正門は昭和初期から栄えた病院通りに面しており、付近にバス停も三箇所あり、今も主要な人流の結節点にあるため、本設計ではリカバリーバスに人を呼び込むきっかけとして並木道を整備することとした。

バスが膨らんだり分かれたりする分岐の要点として盛り土をした大地はそのまま連続して建築となり、訪れる人々を迎え入れ留めさせて受け渡していく。この「けやき並木ギャラリー」はこのように「リカバリーバス」の一部でありながら、東京病院が有する様々な経核療養所時代の歴史的资料を公開する場として市民、患者に開かれる。

1929落成当時の撮影されたけやき並木。現在の長さ約15~20M

閉鎖されている旧正門。右側に当時のコンクリート門の跡が残る

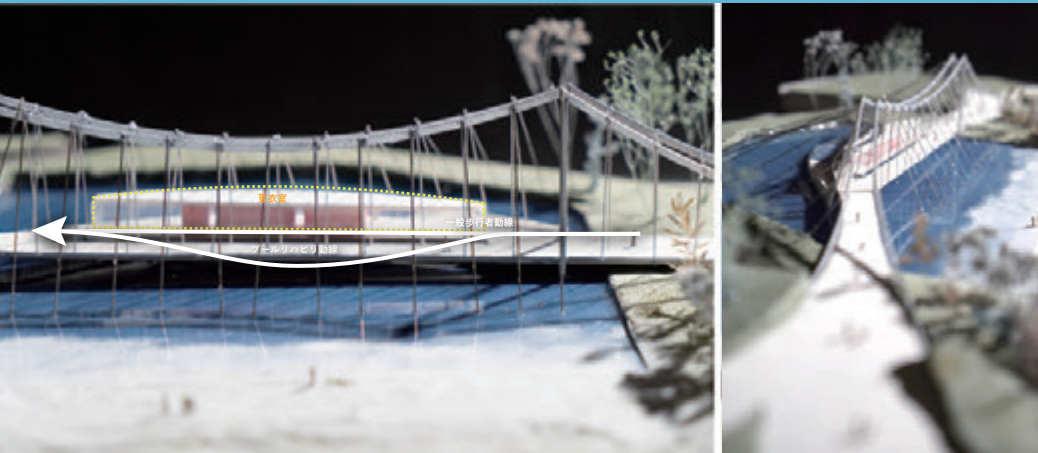
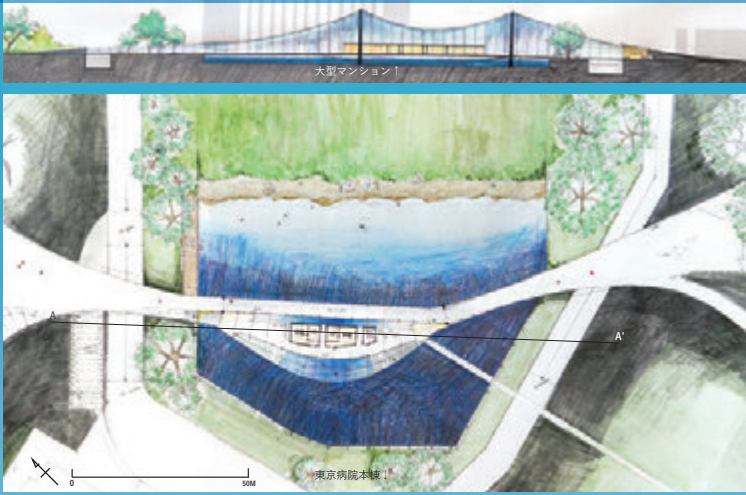
ここでは、東京病院管理棟が保存する療養所時代の歴史資料（患者作成の療養所配置図、絵画、周年誌 etc）を公開する記念ギャラリーとしての役割も持つ。市民の創作発表の場としても機能し、清瀬の経核療養所としての大切な歴史を身近に感じてもらえる。



2 リハビリテーションプールと架け橋

巨大な駐車場が配置されたエントランス、7階建の巨大な病棟と12階建のマニョンに挟まれた現状病院の振る舞いへのアンチテーゼとしてリハビリテーションプールと大きな架け橋として構成することで、リカバリーバスの存在を示すと共に現状病院の正面性を緩和する。

設計では、架け橋の一部を切り取りたるませてプール水面よりレベルを下げることでバスから連続的にプールへとつながっている。人々はリハビリテーションプールを日常的に目にすることでケアへの関心を高めると共に、リハビリが日常の中に共生する感覚を得るようになる。



敷地北側の通りからリハビリテーションプールをみる。手前は芝生で連続的に道とつながり、海のようにプールは奥に行くほど水深が深くなる。

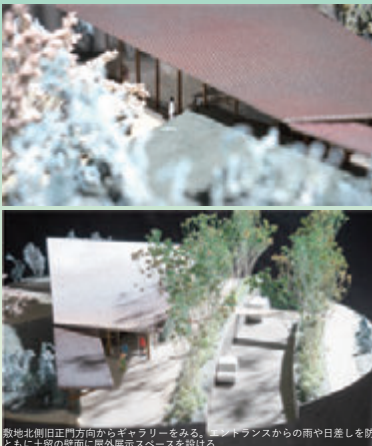
敷地西側からリカバリーバスをみる。バスは水面に沈み込みプールに接続する。



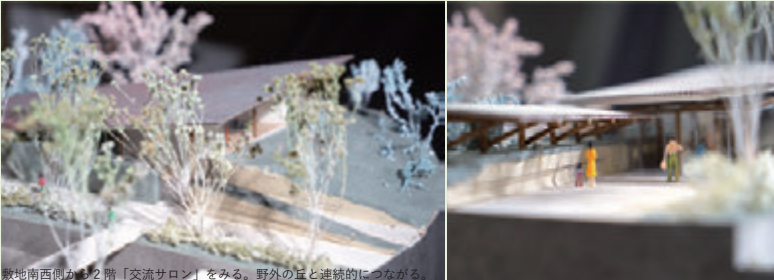
旧正門側アプローチ

2F 多目的サロンから丘へと接続

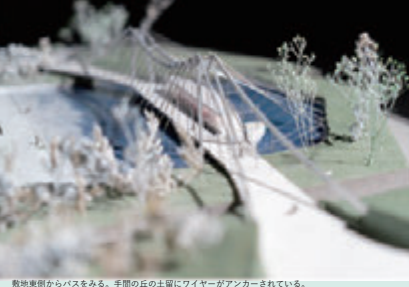
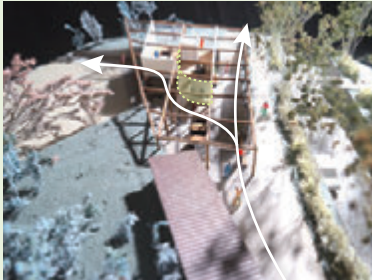
「光・風・土」の建築
 道と土地と自然が一体となる建築の設計を目指した。車道をリカバリーバスと分けるために盛り込んだ土を、種やかな形状として盛り土し、その土面自体が階段を築く土となる構造として、2階室内と連続的に広げられていく。大きく見えるようにかけられた屋根は、夏の直射日光を遮りながらも、雨や雪の大量の光と風を取り込んでいく。これはかつての経核療養所で患者の回復を助けてきた「光と風と自然」を取り込むビルディングタイプを参照し再考した。この清瀬の地にふさわしい新たな「ケアのデザイン」の姿である。



敷地北側旧正門方向からギャラリーをみる。エントランスからの雨や日差しを防ぐとともに土留の壁面に屋外展示スペースを設ける。



敷地南西側から2階「交流サロン」をみる。野外の丘と連続的につながる。



敷地東側からバスをみる。手間の土留にワイヤーがアンカーされている。



バスを通り抜けるだけの人、広場として使う人。奥へと続くように続くシンボルとしての架け橋。先にはけやき並木ギャラリーが続く。

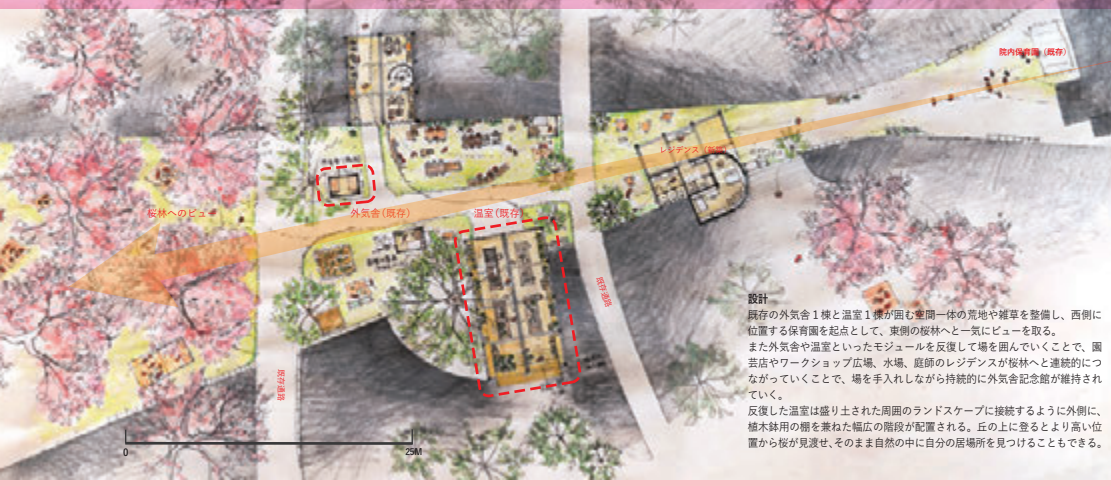


リハビリテーションプールについて 一般的なリハビリテーションにおける作業療法・理学療法において、プールや浴槽に適温の水を張って水圧や浮力を利用するものがある。病院の附属施設としてプールがある事例は日本国内では少ないが、船橋市リハビリセンター、和歌山県丸山整形外科などリハビリ専門の医療施設においては事例がある。右図はスイスにおけるアクアリックリハビリテーションの様子。
 出典：HYDROWORX
<https://www.hydroworx.com/products/hydroworx-2000/>

リハビリテーションプールと架け橋模型 1:300 写真
 現在の独立した総合病院の全面をつなぐようにかかる架け橋。「リカバリーバス」のすがたを大通りから象徴的に見せ、人々に印象付け呼び込む目印となる。

3 外気舎と桜の園

本設計では、前面に広がる桜林にビューをとりながら、既存の温室、外気舎を増幅して場を包む園芸の場をデザインする。現状の荒れ果てた雑木林、外気舎記念館等を手入れ・維持する代わりに病院内の敷地を無料で市内の園芸店に貸し出す取り組みである。



設計
 既存の外気舎1棟と温室1棟が囲む空間一体の荒地や雑草を整備し、西側に位置する保育園を起点として、東側の桜林へと一気にビューを取る。また外気舎や温室といったモジュールを反復して場を囲んでいくことで、園芸店やワークショップ広場、水場、庭師のレジデンスが桜林へと連続的につながっていくことで、場を手入れしながら持続的に外気舎記念館が維持されていく。
 反復した温室は盛り土された周囲のランドスケープに接続するように外側に、植木鉢用の棚を兼ねた幅広い階段が配置される。丘の上に登るとより高い位置から桜が見渡せ、そのまま自然の中に自分の居場所を見つけることもできる。



傷痍軍人東京療養所「外気舎」... 結核の経過観察と作業療法に特化した極めてプリミティブな形態と構法であり、空間も、寝る長さ・立つ高さ・歩く幅によって寸法が決定している必要最小限の空間である。外観は通り過ぎてしまうほど地味であるが、こうした建物こそ保存の目が向けられなければならない。軍事史、国民的疾患の歴史、またイギリスの Sleeping Shelter の導入という医療史的にも重要であり、現存唯一とされる。設計：傷兵保護院工営課（浜野規矩雄と推定）1939年 / 出典：docomomojapan



ほぼ手入れがなされていない荒れ放題の敷地



外気舎に隣接する放棄された温室



傷痍軍人東京療養所「外気舎」移築保存の様子



4 市民農園と神社

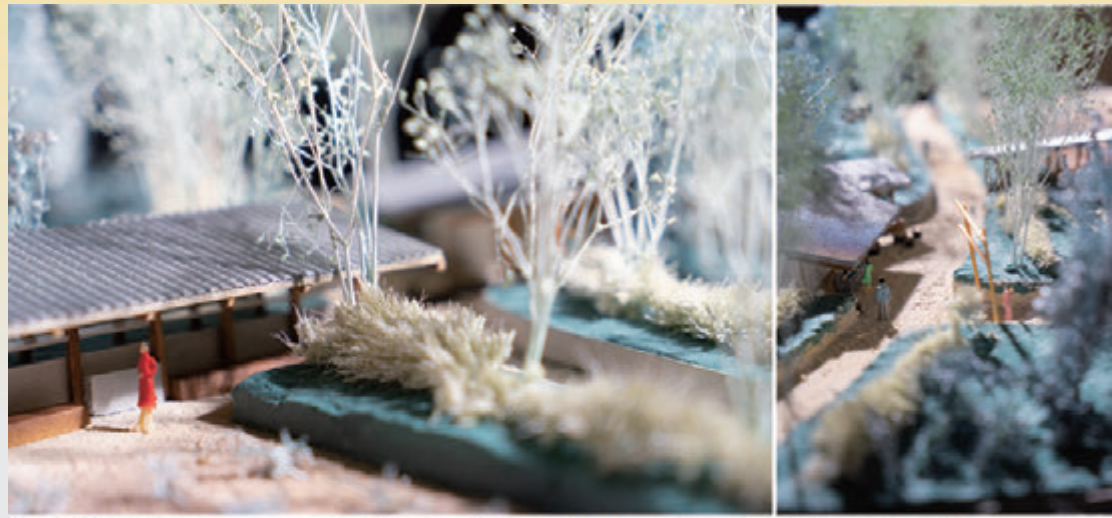
現状福祉施設移転に伴い広大な空き地となっている敷地南部に近隣の市民農園の拡張地として農園を整備し、ヤギなどの動物の飼育を含めた日常的な農地の整備を行う。これは病院敷地内のリカバリーファームとして、すでに実施されている東京病院看護士の栄養管理ワークショップや、アニマルセラピーとしてのヤギ、ゴニーの飼育などを行う場でもある。
 裏に位置する神社は傷痍軍人東京療養所時代に建立された神社で、現状は雑木林に包まれ放棄されている。神社の基礎等は残っていると推測されるので市内の水天宮の分社として再整備し、病院の森と地域の人々を守る存在となる。



(上) 1300 模型写真、南側ファームから神社をみる (下) 神社が寄する森の現状

東京病院主催の栄養管理ワークショップ
 国立病院機構東京病院では、現状平日の 9:00-12:00、栄養管理室主導で無料の栄養指導ワークショップを行っている。また、福祉相談等の窓口等も設けているがあまり周辺住民等には認知されていない。出典：東京病院 H.P 栄養管理室

清瀬市の市民農園とヤギ
 清瀬市はふれあい農産推進の一環として市内 3ヶ所に市民農園を整備している。また、市内の福祉施設では市民の有志者によってヤギをレンタルしアニマルセラピーを行っている。右図は清瀬市特別支援学校時のヤギ、東京病院の栄養管理室、竹丘の市民農園。出典：清瀬市ホームページ



左上から
 1. 市民農園のベンチと手洗い場
 2. 手前の神社から手水舎をみる
 3. 敷地西側から市民農園の栄養管理ワークショップが行われているキッチンを見る。
 4. 神社の狛犬道を歩く。